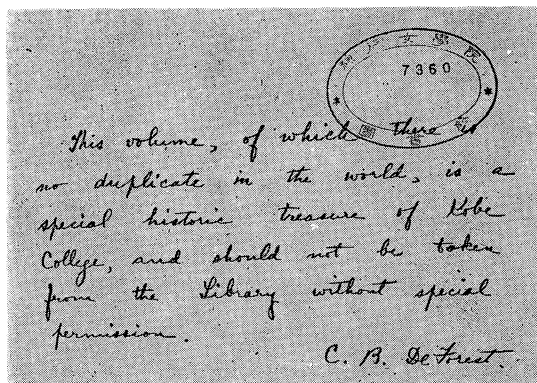


デフォレスト先生と史料集

渡 辺 久 雄

神戸女学院の創立者イライザ・タルカット女史に関する史料は意外に少ない。特別な場合を除いて、創立当時の記録が乏しいのは一般に共通している。創立期というものは一人ひとりが多忙であり、後世の為に記録を保存するとは、特に専門の人がいない限り不可能である。

このような乏しい記録の中にあつて、唯一ともいえる記録は、第五代院長デフォレスト先生の残した“ELIZA TALCOTT FOUNDER OF KOBE COLLEGE” 1919 であろう。もちろんこの記録も、創立当時の史料を集めたものではなく、タルカット女史の歿後（一九一一年歿）、その追憶の意味も含めて、この時点で集めることのできた史料（二次および二次史料）を編集したものである。しかしそれから六〇年余を経た今日では、タルカット女史に関する貴重な手掛かりということが出来る。デフォレスト先生がよくぞ残して下さった、と感謝せざるを得ない。この本の開巻第一ページの扉に「この本は世界中どこにも複本のない、神戸女学院の特別な歴史的宝物である。したがって特に許可されない限り、図書館からの帯出を禁じる」と、先生のペン書きとサインが掲げられていて、この本の重みを今更ながら感じる。



デフォレスト先生作成の史料集・中扉のメモ

また編集に当たっては「一九一九年七月、この本を作成した。シャロット・B・デフォレスト、一九一七年卒業生藤田トキ、一九二〇年卒業生黒羽千年」とあって協力者のあったことがわかる。このうち、藤田トキ姉は音楽部の卒業生で、後年音楽部の教授となり、多年音楽教育に従って昭和三十九年に亡くなられた方である。

さて、この本の内容であるが、デフォレスト先生が神戸女学院図書館に寄贈した一九二〇年（大正九年）の時点では一九点の史料が収められていたが、その後更に七点の追加が行われ、その中には一九二六年（大正十五年）・一九三〇年（昭和五年）のもの二点が収録されている。以下その内容を目次に従って述べることにする。

- 1、署名入りタルカット女史写真（原本）。
- 2、一九一一年（明治四十四年）十二月十五日付の『ミッションニューズ』第三号（神戸発行）「タルカット追悼記念号」からの切抜きである。冒頭にこの号の編者によるタルカット女史紹介の文があり、続いて「タルカット女史の出自・教育・ライフワーク」と題したA・W・スタンフォード氏の追憶文、M・J・バロウズ女史による「タルカット女史の思い出」、J・H・ペティー氏による「中国地方における活動」、E・E・ケリー夫人による「女史の特徴」の四点が収められている。
- 3、次のページに、一九〇八年に撮った女史の写真と、神戸女子神学校一九

一一年卒業式で撮った最後の写真が掲載されている。また追加史料として一八九五年（明治二十八年）に横浜で刊行された「日本と中国の兵士の中のミッシェンレディ」と題するパンフレットが貼りつけてある。こうした史料が、後年しばしば引用されるタルカット女史の広島陸軍病院での活躍内容の出典となるのである。

4、『ミッシェンニュース』の引用に続いて、同様な掲載記事の切抜きが二点貼ってある。その中の一点は、B・G・ノースロップ師による「日本のクララ・バートン」と題するもので、一八九六年二月二十七日付の『コングリゲーションナリスト』誌に載ったものの、他の一点は「ミッシェンナリーの女丈夫八苦悩の中国兵士達に光をもたらした、もうひとりのフローレンス・ナイチンゲール」と題したJ・A・コックリル氏の記事である。内容を紹介する紙面がないが、今後のタルカット女史研究上の一つの手掛かりとなる史料であろう。

5、一八八二年（明治十五年）十二月撮影の神戸女学院第一回卒業生達とタルカット女史、二人の教師の写真（原本）。当時のものとしては極めて良く写してあるので、しばしば引用されている。

（補）「O・H・ギューリック師夫妻宛に出した書簡」と題したパンフレットが収録されている。パンフレットであるから原文ではなく、神戸女学院図書館印と共にこのパンフレットが一九三一年（昭和六年）七月に受け入れられたものであることがわかるから、その後、デフォレスト先生により、更に本書に補入されたものであろう。このパンフレットの表紙には「アメリカ合衆国ハワイ・ホノルルのO・H・ギューリック師夫妻宛書簡」とあり、下段には「夫妻の結婚五〇周年記念を迎えるにあたり、A・B・C・F・M・（American Board of Commissioners for Foreign Missions）日本伝道団の臨時委員会の議決によって準備されたものである」と誌されている。本文はギューリック師夫妻宛に、一九〇五年（明治三十八年）一月七日付で、東京からタルカット女史とD・C・グリーン師が連名でホノルルに出した手紙である。もちろん原文でなく印刷物ではあるが、下段に示された註記から考えて、原文に劣らない

価値を持つものと思われる。

6、「タルカッタ女史を記念して」と題した、一九一六年（大正五年）十二月発行の『めぐみ』誌掲載のデフォレスト先生によるタルカッタ女史追憶文の再録である。一九一六年（大正五年）は、タルカッタ女史歿後五年目、デフォレスト先生が院長就任の翌年に当たる。その内容は、要を得たタルカッタ女史小伝というにふさわしい四ページ程のものであるが、この文の冒頭書き出しのところで、タルカッタ女史の命日である十一月一日が、英国国教会やカトリック教会のカレンダーでは「諸聖人の日」として、死者を追憶する特別な日として認められていることを述べ、神戸女学院で、タルカッタ女史の誕生日の五月二十二日を「創立者記念日」として守っているが、その命日には何も行なっていない。それで歿後五年を経た今日、タルカッタ女史の人格や功績について考えてみる必要がある、と述べているのが印象的である。

7、タルカッタ女史の甥に当たる京都在住のD・W・ラーネド博士よりの書簡のタイプライティング・コピー。従って宛名・発信年月日の記載はないが、デフォレスト先生宛のものとして推定される。発信年月日については、手紙の内容がタルカッタ女史にまつわるエピソードや女史の性格などに関するものであるから、恐らくタルカッタ女史歿後、デフォレスト先生の問合せに答えたものと考えられ、一九一一年から一六年の間の発信であろう。

8、スタンフォード夫人邸の庭で撮ったキリスト教婦人会のメンバーとタルカッタ女史の写真（原本）。

9、一九一七年（大正六年）五月二十二日実施の神戸女学院創立記念日プログラム。英文のものは“Kobe College Founder's Day”とあって、邦文の表題は「神戸女学院創立記念日」となっている。これは既に一九〇九年（明治四十二年）に、タルカッタ女史の誕生日に当たる五月二十二日をもって神戸女学院の創立記念日と定めたことによったからであろう。しかし後年になり、この五月二十二日は英文の通りの創立者記念日となり、十月十二日をもって創立

記念日と定めて現在に及んでいる。

なお、プログラムによると、当日の記念行事として、(一)記念式典 (二)記念植樹 (三)職員祈禱会 (四)記念文学会 (文学会主催)が行なわれたことがわかる。

10、前掲(四)記念文学会で上演された劇「タルカット女史の一代」の脚本。第一部アメリカ時代、第二部日本時代が、それぞれ五・六幕に分けられて上演された。脚本の中で、第二部・五幕の「布哇にて」は、この本の編集当時、既に散佚していた旨の註記がある。脚本には邦文もついているが邦訳には問題が多い。

11、一九一六年(大正五年)六月二十三日、神戸女子神学校におけるダッドレー、タルカット両女史追憶記念会の席上で行なわれた、市田ひさ夫人の談話。ただしこの話は前掲の脚本第二部日本時代の第二幕「神戸英和女学校時代―第一回卒業生市田夫人の追想―」の内容である。

12、京都同志社看護婦養成学校におけるタルカット女史の活動について、第五回卒業生、百崎志づ子夫人の談話。
(邦文)

13、ベル氏より京都のD・W・ラーネド博士に宛てた一九一一年(明治四十四年)十二月八日付の書簡。内容はタルカット女史の逝去を悼むと共に、自分にとって女史はホノルルでの数時間の会見であったが、深い感銘を与えられたことを、幾つかのエピソードを交えて述べている。この手紙の内容が、後年になって、前掲の劇「タルカット女史の一代」、第二部日本時代の第五幕「布哇にて」の脚本内容となるものである。

(補) 一九一一年(明治四十四年)十一月十六日付京都発信、D・W・ラーネド博士よりスタンフォード氏宛書簡。

その内容はタルカット女史の米国に於ける家族関係に始まり、学校時代、卒業後の出来事、日本伝道への志向、日本各地での伝道と学校経営、ハワイにおける日本人伝道等について述べ、女史程多方面にわたり、さまざまな分

野で献身的に活躍したミッション関係の女性を見たことがない、とその功績をたたえている。又この手紙の冒頭で「私の書きますことは印刷を考えてのものではありませんが、あなたのご判断でご利用下さい」とあるので、恐らく後日出されたミッションニューズの記事の素材になったかと思われる。

14、「故タルカッタ師五周年記念歌」として座古愛子姉作の譜面が収録されている。作詩であり、曲はシューベルトの菩提樹を使っている。五周年記念歌とあって歌われた日時は明記されていないが、11、で述べた一九一六年六月二十三日、神戸女子神学校における追悼記念会の折であったかもしれない。

15、「ミス、タルカッタ記念傳道基金募集趣意書」（邦文の一枚刷、寄付申込書付き、縦二〇センチ・横六〇センチの寸法）。

16、故タルカッタ女史小傳（邦文の一枚刷、縦二〇センチ・横六〇センチの寸法）。

全文四号活字で三二字詰七五行から成り、神戸女学院教師館および事務所・タルカッタ女史肖像・神戸女子神学校の三枚の写真が印刷されている。これは『基督教世界』に掲載されたものと同じ文言の小伝で、『めぐみ』五三号にも転載されている。

17、神戸女学院図書館のタルカッタ記念文庫蔵書票図。図柄の上欄には「大正三年五月 日、故タルカッタ嬢記念図書 寄贈 婦人伝道会社ブリングフィールド支部」とあり、下欄に英訳文が書かれている。

18、ポストンに在る婦人伝道会が出版した「バイオニアシリーズ」の一つ。タルカッタ女史の令妹ローラ・E・ラーネドの書いた「イライザ・タルカッタ」と題したパンフレット版二〇ページが収録されている。

その内容は、他のタルカッタ伝と同様に、出生地、家族、学校、卒業後の動静、外国伝道、日本へ渡る、神戸女学院創設、日本各地への伝道旅行、広島陸軍病院での「慈悲の天使」、ホノルルでの静養、ハワイ伝道、神戸女子神学校時代、逝去などから成っている。このパンフレットにも「日本のフロレンス・ナイチンゲール」という副

題がついている。

19、同窓会『めぐみ』誌に載せられているタルカット女史関係記事のレファレンス。(19、の内容はすべて邦文)

(一)明治四十二年十二月二十日号に載ったソール院長のタルカット女史に関する講話。

(二)明治四十五年一月一日号。タルカット女史逝去に関する十一月一日〜四日の院内記事再録。その他の関連記事。

(三)明治四十五年七月一日号。院内記事としてタルカット女史記念会の件がある。

20、大正五年(一九一六年)三月二十九日午後一時三十分開会「神戸女学院創立第四十年記念祝会挙行順序」(邦文)。プログラムの中に「名誉院長推戴式ならびに新院長就任式」とあるのは、前者がソール女史、後者がデフォレスト先生に当たる。プログラムの片面に「創立記念日の歌」の歌詞が載っている。

21、一九一一年(明治四十四年)十一月六日月曜日、鳥取への帰任途上、兵庫県香住で認められた B・W・ペティー夫人よりデフォレスト夫人(デフォレスト先生の母君)に宛てて出された書簡。タルカット女史最後の週の病床の様子と葬儀当日の有様が埋葬に至るまで、詳細に報告されている。

22、ソール女史によって書かれた「日本のフロレンス・ナイチンゲール」と題する記事の写し。これと同じ内容のものが『ミッシヨナリー・ヘラルド』一九一二年一月号に掲載されている。

23、この本の編集(一九一九年)以後、タルカット女史に関して得た一九三〇年までの史料を、デフォレスト先生が一括して補入したものである。

(一)タルカット女史の姪に当たる G・F・リチャーズ夫人が一九二九年十月、神戸女学院を訪れた折、生徒達に話したタルカット女史のエピソード。またデフォレスト先生に直接に話した内容。

(二)一九三〇年の春、長谷部夫人と共に尼崎在住の八十九歳の末吉さよ夫人を訪れた折に聞いたタルカット女史の話。

(三)一九三〇年の創立者記念日の折、神戸女子神学校でタルカッタ女史の教えを受けた児玉こま夫人が、神戸女学院で語ったタルカッタ女史の伝道のエピソード。

24、一九二六年(大正十五年)九月二十四日付で、米国コネチカッタ州タルカッタヴィル在住のJ・G・タルカッタ氏がデフォレスト先生宛に出した書簡。

この書簡は、デフォレスト先生からの問合わせに対する返事である。その内容は、――やっと尋ね当てたロックヴィルの従兄弟のタルカッタ氏は女史の出生地すら知らぬ有様で、何の情報も得られなかったこと。女史が住んでいた家も、取り払われてしまったと考えている人もいたこと。ここでは老人であるこの従兄弟を除いて、タルカッタ家について知っている人は誰も居ないこと。更に、先祖は英国から渡って来たジョン・タルカッタではあるが、女史はタルカッタ家の別の系譜に属し、自分とは直接的な関係がないこと――を述べている。

(本書では、特に邦文と明記した以外のものは、すべて英文による手書き、タイプ、活版印刷である。)